社会階層研究への目覚めと格闘

私の3冊

- Peter M. Blau and Otis D. Duncan, 1967, *The American Occupational Structure*, Wiley snd Sons
- 安田三郎，1971，『社会移動の研究』東京大学出版会
- 富永健一編，1979，『日本の階層構造』東京大学出版会

今田高俊（東京工業大学名誉教授・統計数理研究所客員教授）

✳ 1 Blau and Duncan, *The American Occupational Structure*

社会学における実証研究のベンチマーク

私の恩師である富永健一先生から「1975年社会階層と社会移動全国調査（略称SSM全国調査）をやることになったのでよろしく」と言われたのは，確か1974年，私が東京大学大学院社会学研究科に修士2年生として在籍していたときのことである。その際の参照基準となったのがこの書物であった。私は理論社会学に取り組むことにしていたので，ちょっと躊躇し悩んだが，それをみて先生は「君ね，社会学をやるなら理論と実証ともにやれなきゃほんものにはならないよ」と駄目押しされて，それならやってみようということで，まずはこの本を読むことにした。

この本のどこが素晴らしかったかというと，社会的地位達成過程を本人のライフサイクルに合わせて分析できるパス解析（標準化されたデータによる回帰分析）を階層研究に導入した点である。ある社会経済的地位をもった親のもとに生まれ育って，学校教育を受け，その後，初職について職歴を経て現職に至るという地位達成過程を因果構造として解明する分析手法を樹立したことである。著者の1人であるピーター・ブラウは交換理論を基礎とした理論社会学者として著名であったから，本書には理論家ならではの記述も随所にあって，なるほどとうなずかされる箇所も少なからずある。もう1人の著者であるオーティス・ダンカンは20世紀後半を代表する社会統計学者で，パス解析を社会学に導入するとともに，社会経済的地位指標を工夫した人物でもある。本書では，理論家と実証家のコラボレーションが見事になされていて，アメリカ社会における社会階層の形成過程がリアルに解明されている。

1975年SSM調査は，この新しい分析手法を用いて，戦後日本社会の階層構造の変容を解明することを焦点とした。当時，SSM調査に参加した若手メンバーはこぞってパス解析を用いた。とはいえ，専門書であるために，邦訳は出版されなかった。翻訳の企画を立てて1章分の翻訳原稿を添えて東京大学出版会に持ち込んだが，販売の見通しが立たないということで，没になった記憶が今でも鮮明に残っている。このことは別にして，本書によって社会学における量的調査研究のレベルが飛躍的に高まった。コンピュータを駆使した実証研究の大きな潮流が社会学に生み出された。

✳ 2 安田三郎『社会移動の研究』

欧米と伍した研究成果に日本人魂を感じる

日本の社会統計学の第一人者である安田三郎先生が，東京教育大学（現筑波大学）から東京大学社会学科に赴任されてこられたのは，1971年のことだったと記憶している。安田先生は社会統計学の専門家として赴任されたが，社会移動研究では世界に知られる研究者であった。社会移動の開放性を表示する*Y*係数を独自に発案され，その成果が*American Sociological Review*に掲載された。本書は，この係数を縦横無尽に駆使した諸論文を基に大幅な新規加筆を施した大著である。

安田先生は1965年SSM全国調査でリーダーシップを発揮されたが，パス解析を用いた分析には消極的で，移動表分析へのこだわりを最後まで崩されなかった。本書を紐解くとわかるが，1940年代後半にイギリスのデーヴィッド・グラースを中心として開発され，1955年第1回SSM全国調査の主たる分析法となった移動指数に対する執拗なまでの批判が繰り返される。そのうえに開放性係数（*Y*係数）が提唱される。そして，この指数を用いて，社会移動の趨勢，社会移動の国際比較，女性の社会移動，家族と社会移動，社会移動にお

ける教育の機能，社会移動の意識などについて，既存研究の批判をつうじた検討がなされている。そこには実証研究家としてのこだわりと執念が感じ取れる。本書で扱われているテーマは，その後のSSM研究がカバーすべき領域を先取りしていたといえるだろう。

本書におけるもう1つのこだわりは，社会階層概念を拒否していることである。社会移動の定義に際して社会階層概念を用いることは有害無益であるとまで述べられている。社会階層（階級）の概念によって複雑多岐にわたる論争が繰り広げられているが，そのような有害無益な論争を終結させるためには，「社会階層を社会学におけるキー概念から追放しなければならない」とするラディカリズムが本書の底流となっている。社会移動とは社会的地位の移動であると定義されているのだから，序列づけられた地位のグループとしての社会階層概念を用いても不自然ではないと当時は思ったが，先生は平等主義イデオロギーに立つかぎり個々人の社会移動における機会均等を（開放性係数で）分析すればよいのであって，階級（階層）といった集団概念を持ち出すから話がもつれてくると力説されていた光景が忘れ難い思い出である。

※ 3　富永健一編『日本の階層構造』
戦後日本の繁栄を極めた中流社会を解明

本書のもとになった1975年SSM全国調査のねらいは，戦後の復興から高度経済成長を経て，日本が先進産業社会の仲間入りを果たした足跡を，中流社会の実現を主テーマに分析することにあった。富永先生は産業化論，近代化論の理論家であったから，戦後の日本の経済成長と民主化過程を実証することを使命とされていた。また，安田先生とは異なって社会階層概念を前面に打ち出し，新中間層の成熟と機会均等な社会の実現を検証することに多大の労力を払われた。後に，社会学者として40歳代を無為に過ごしたと嘆かれることもあったが，「理論と実証の双方ができないと駄目」といって階層研究に巻き込まれる運命となった私にとっては，「そういわれては身も蓋もない」との思いを禁じえなかった次第である。

そのことはともかく，富永先生をはじめ研究参加者の努力もあって，本書は1955年以来10年ごとに実施されてきたSSM全国調査の意義を不動のものとする成果となった。本書が出版された1979年は，エズラ・ヴォーゲル教授が『ジャパン・アズ・ナンバーワン』というベストセラーを著した年であり，これを契機にして戦後日本の経済的ミラクルが云々されるようになった。その潮流に本書も一役買ったことは事実である。学校教育を介した機会均等な社会的地位達成の実現，高度経済成長による生活水準の上昇と平準化，地位の非一貫性を伴った中間大衆社会の実現など，「9割中間社会」「一億総中流」としてマスコミによる社会的関心の高まりがみられた。学歴効用論が叫ばれ，1980年代日本のバブル経済状態へとつながっていった。

写真　富永健一先生（右）と筆者
――定年退官を祝う会にて

本書は，戦後日本の復興過程から高度成長を経て，成熟期に入った状態を記すメルクマールとなる書物といえる。しかも，富永先生も書かれているように，「諸外国における階層研究に伍して，科学的分析の水準においてそん色のない日本社会分析たろうと意図」したものである。本書のプロジェクトに参加した若手のメンバーは，本書を踏み台にして欧米諸国と互角に研究するきっかけをつかむことができたように思われる。2005年SSM全国調査を含め，1955年以来合計6回の調査が実施されているが，本書はその継続の源泉となっている。

私は1975年SSM全国調査の事務局を担当し，調査の始まりから本書の完成までの5年間，調査の設計からデータ分析を経て論文の作成に至るまで悪戦苦闘の連続であったが，現在ではその経験が理論研究にも役立っているように思える。